

中央アジア・トユク遺蹟仏教寺院壁画断片に 表現された「宝珠」について

仲 嶺 真 信

はじめに

仏教世界において、敬虔なる信仰の所産であり、かつ常に神聖なる象徴として君臨するもの一つに所謂「宝珠」がある。この象徴の意味するところは、「その所有者の総ての願を成就せしむるもの」と考えられている。簡潔には、「清浄なるもの」或いは「威徳あるもの」等と意味づけられているが、所謂「宝珠」の研究には、二種の方法が考えられる。即ち、一が、その思想的研究であり、二が、その形態的研究である。前者は、深遠なる問題を有するが故に、その研究も複雑多岐に渡り、一気呵成には解明できない様相を示している。一方、後者は、その形態が、多種多様ではありながらも、しかし、ある種の一定の形態概念の中で、大方の研究が進められているように思われる。本稿は、ささやかではあるが、両研究面の序説的段階として、新しく別の角度から、ある一つの「宝珠」について焦点を合わせて言及を試みた。

ところで、所謂「宝珠」の形態について考える場合、我々の大方は、まず最初に、珠状の形態を想起する訳だが、果して、それは一体どうしてなのだろうかと問われても、普通には、それが多く知見されるからとしか答えようがない。ところが、一旦、眼を遙かなる中央アジアに転ずれば、そこに温存された古代仏教美術の諸例には、何と摩訶不

思議な形態の「宝珠」が散見されることか。この異様な「宝珠」の突如の出現に際して、我々は、瞠目せざるをえない。私が、本稿に、中央アジアの吐峪溝(Toyug, Toyuk)遺蹟の「宝珠」を採用したのは、実は、我国では、未だに確認されぬ摩訶不思議な「宝珠」との貴重な遭遇による驚異がその主な動機になっている。端的に申して、「宝珠」の形態は、四角柱状、或いは、角状であり、決して珠状ではないのである。しかも、有力な証拠として、壁画中の銘文には、判然とその形態を「宝珠」と記しているのである。従来、この種の「宝珠」については、既に、グリューンウエーデル氏の高著¹⁾に若干紹介されていたが、銘文を伴った例は、管見によると、この一例のみである。

さて、本稿の主題となる異様な「宝珠」の分布は、中央アジア一帯に限られているだけでなく、中国内地の一部にも確認されるが、但し、この小論では、制作年代が、ほぼ七世紀半ば前後頃と推察される中央アジア・吐魯番地域の吐峪溝の一例のみを中心に取り扱う。

まず、方法としては、所謂「宝珠」の意味を考えていく中で、形態や名称の問題、及び、壁画に見られる諸要素の問題を検討し、本稿の壁画断片の持つ意義について考察を進めたい。尚、その前に、特異な「宝珠」の出土地である吐峪溝遺蹟を包む中央アジア吐魯番地域一帯について概観しておく必要がある。

(一) 吐魯番地域

さて、まず当面の地域を地理的に説明すると、中央アジア隨一の大沙漠タクラマカンを含み込むタリム盆地の東北に位置するのが、小沙漠盆地トウルファンである。ここは、天山山系の東端ボグドオーラ山脈とクルック・タグに囲まれた一部分であり、東西約120km、南北約60kmの範囲内には、アジアの井戸とも呼ばれ、中国における最低地で知られるアイディンクル塩湖がある。一方、歴史的には、古くからの絲綢之路の要衝・天山南路北道上に位置し、中国、北方民族共に、この地域を支配しようとする努力が幾度か繰返された。中でも、漢人の勢力が延びて、その侵略と殖民が盛んに進んだところで、事実、吐魯番地域のアスターナ（阿斯塔那）遺蹟からは、およそ、四世紀後半以降唐代までの紀年銘を伴う古墓群とその遺品等とが発掘され、中国墓制に倣うものであったことが判明している。又、同じくこの地からは、大量の文書等が出土し、その大部分は、漢文で記され、中原地域と同じ典章制度と經濟文化生活が記載されていた。

ところで、蘭州出身の漢人麴氏一族が、この地域に高昌国を樹立した（5C）、やがて大唐帝国の太宗は、貞觀十四（640）年に高昌国を統一し、この地を西州と改称した。なお、高昌国王麴文泰は、宏豁たる流沙や険峻なる山脈を踰越し、遙然たる天竺国へ、求法のために羈旅となつた高僧玄奘を彼の寄留の間、待遇したが、玄奘は、計り知れない貢献をここで受けている。今、本稿の中心となる吐峪溝遺蹟からは、数々の唐代仏教資料が、諸外国の探検隊により発掘され、将来されている。任意的に、若干例をあげると、まず、ドイツ隊による「木彫十一面觀音立像」や大谷隊による「童形飛天図」、「阿弥陀經」断片（唐僧善導大師願經）等が、それ／＼の国に将来されている。一方、スタイン氏の率いるイギリス隊もこの地より、少なからぬ遺品等を収集しているが、それらの中の一例が、本稿の貴重な壁画断片であつた。

(二) 形態

さて、冒頭でも触れたように、所謂「宝珠」に関して、我々は、一般的に、まず最初に、珠状の形態を想起する訳だが、その代表的なものに、日常、我々が見慣れている仏塔の相輪や八角円堂露盤上の「宝珠」或いは、仏壇や高欄上に見られる「擬宝珠」等があげられる。それらは、なるほど、基部は玉のように丸く、その頂上がいくらか尖つていて、丁度、全体としては、葱坊主のような恰好をしている。このような形態の成立の原因は、恐らく次のような仏典の記載類から多分に影響を受けているものと考えてよいだろう。即ち、『陀羅尼集經』によると、

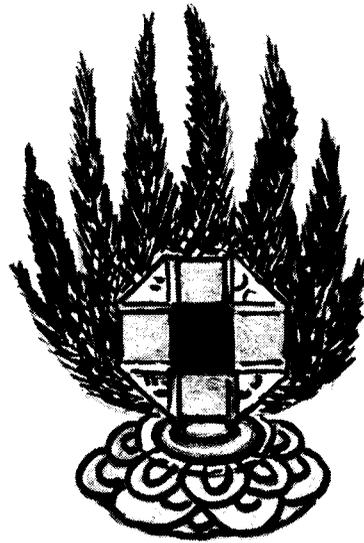
「其手掌擊真陀摩尼唐此云如意珠也、其珠団円如作白色、赤色光焰圍繞其珠」¹⁰

ここに見られる「宝珠」は、白色の団円の珠で、赤色の光焰がそれを圍繞する表現で形成される。このような形態が、一般的な「宝珠」の形であるが、しかし、それは、「宝珠」の諸形態の一種にし過ぎないのである。と言うのは、本稿で扱う「宝珠」の形態が、類い稀なる特殊なものとして嚴存するからである。この特殊形の「宝珠」を、直接、文献上支持してくれる記載を、私は寡聞にして知見していないが、例えば次のような仏典に見られる八角形状の「宝珠」の存在によつて、傍証的に、本稿の「宝珠」はもとより、その他の角状「宝珠」の裏付けをも暗示できよう。即ち、『增一阿含經』卷三十三、等法品第三十九によると、

「転輪聖王出—現レ世時、是時珠寶、從二東方—來、而有二八角—四面有二火（大）光、長一尺六寸」（傍点筆者）

右記に見られるような形態の「宝珠」については、グリユーンウェーデル氏の高著で紹介されている蓮華上の不思議な「宝珠」（挿図1）が示唆的である。尚、この形態は、八角状と見なされるものであるが、

その八方向から焰を発している。右記の仏典に言う「四面」は、「八方」と同義に考えてよいものと思う。³⁾



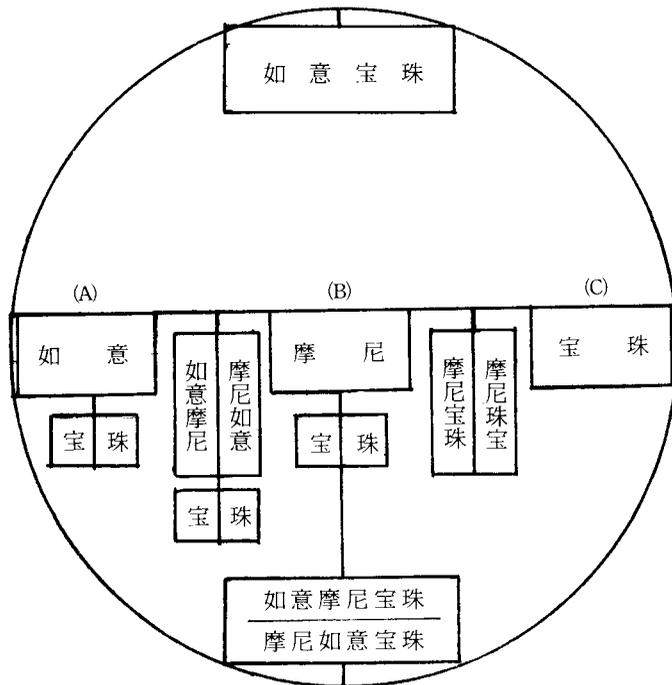
挿図1 グリュンウェーデル本より作成

以上、「宝珠」の形態は、通常は、珠状が圧倒的に多いが、今触れたような角状の「宝珠」も多少見られることが確認された。従って、本稿においては、「宝珠」の形態の概念を再考すると同時に、広く設定していく必要がある。本稿の「宝珠」は、後述するように、透過性の四角柱状、或いは、外側の輪郭線のみで見ると六角形状とも見なされ、事実、非珠であることは画然としている。従って、敢えて、本稿の主題に採用してみた訳である。

壁画に見られる「宝珠」に関して、具体的な考察を加えるためには、その前提として、所謂「宝珠」の名称と意味とについて、煩雑さを厭わず、改めて詳細な考察が必要となる。次にそれを述べていきたい。

(三) <Cintā-maṇi> の諸漢訳

左の挿図2は、『大正新脩大藏經』を基に作成した所謂「宝珠」を指示する諸訳例の図示で、次に述べるような諸特徴をもつ。



挿図2 <cintā-maṇi> の諸訳例

まず、梵語「Cintā-maṇi」を意味する諸表記を、大きく三つの軸に分類し整理すると、(A)如意、(B)摩尼(末尼)、(C)宝珠の三表記の系列が配置される。換言すると、これらの三表記の組合せのバリエーションが図に見られる諸表記である。

さて、次に、所謂「宝珠」という表記は、(A)如意・(B)摩尼との組合

せの場合、常にそれらの末尾に付き、逆に、(A)・(B)二者は必ず(C)宝珠の前に置かれるという規則性をもつ。更に、「宝珠」は、「宝」と「珠」とに二分解され、相互に前後の交換が全く自由であり、その順序はそれ程重要ではない。この点は、後述する『梵和辞典』の訳出例に見られる「珠寶」或いは「宝珠」の表記と符合する。このようなことは、「如意」や「摩尼」との合成の場合にも見られ、その前後の順序関係は大して意味を持たない。又、組合せ法は、二つの軸や三つの軸の場合があり、例えば、(A)と(B)の合成で、「如意摩尼」或いは「摩尼如意」更に、(A)と(B)と(C)の合成で、「如意摩尼宝珠」或いは「摩尼如意宝珠」等が作成される。尚、(A)と(C)、(B)と(C)との合成の場合、(C)が、「宝」と「珠」に分離するため、例えば前者は、「如意珠」或いは、「如意宝」、後者は、「摩尼珠」或いは「摩尼宝」等の諸訳例が出てくる。

ともあれ、所謂「宝珠」を指示する諸表記は、右に見てきたようなバリエーションをも含めて、多種多様な同意名称で合成されているので、この点を注意しなければならない。後で触れることになるが、所謂「宝珠」の意味を、梵漢辞典と漢訳仏典との両者から詳しく比較検討し、改めて「宝珠」の概念を再考してみたい。そうすることによって、「宝珠」の形態についての或る固定観念も払拭され、次いで、本稿の異様な「宝珠」についても正しく認識できることと思うのである。

(四) 「宝珠」の意味

『仁王護国般若波羅密多經疏』卷下三によると、

「梵云摩尼、此翻為寶、順旧訳也、新云末尼具足、応云震跡末尼、此云思惟宝、会意翻云如意宝珠、意所求皆満足故。」¹⁶

右記に見られる「摩尼」、「宝」、「末尼具足」、「震跡末尼」、「思惟宝」、

「如意宝珠」等の諸表記は、所謂「宝珠」の多種多様な同意名称に他ならない。それらの中の「如意宝珠」は、文字通り、思うがままに、

希・求・す・る・こ・と・総・て・が・満・足・せ・ら・れ・る・も・の・を・意・味・し・て・い・る。この表記は、他のそれより比較的常用されるが、所謂「宝珠」は、その省略形である。

ともあれ、前記のような諸漢訳表記の出所は、元来、印度の梵語にある。そこで次に、梵語におけるそのオリジナルを考察したい。

先程の漢訳表記の一つに「震跡末尼」があるが、これは、梵語の音を漢字で音写したものである。梵語においては、「Cinta-mani」と表記され、『漢訳対照梵和大辞典』を典拠にして考えると、この意味は次のようである。

「Cinta-mani」(その所有者の総ての願を成就せしむるもの)、如意宝珠、空想的の寶石、

漢訳・如意、如意珠、如意宝、如意宝珠、

音写・如意摩尼、

右記の梵語での意味「その所有者の総ての願を成就せしむるもの」は、前記の漢訳「会意翻云如意宝珠、意所求皆満足故」と符合する。ここで注目すべきは、「空想的の寶石」と訳出されていることである。この意味は、本稿の異様な「宝珠」の場合に適切であるといえよう。それは、後で紹介する挿図に見られるように、摩訶不思議な形態で表現されている。

一方、『金光明最勝王經疏』卷五、如意宝珠品第十四によると、

「二釈名者梵云震多、此云如意、一本音但名、意心思量義、如者義加、末尼者此云宝珠。」²⁰

右記を整理すると、「震多」||「如意」、「意」||「心思量」、「末尼」||「宝珠」となり、従って「震多末尼」||「如意宝珠」という意味が

辿れる。

ところで、更に「Cinta-mani」を二分解して考えてみると、前者の「Cinta」は、梵語の意味では「思考、熟慮、考察、不安、憂慮」となり、漢訳では「思、思惟、諦思惟、思量、思摂、正思、念心意」となる。次に後者の「mani」は、梵語では「真珠、珠玉、寶石、小珠」となるが、漢訳では「珠、意珠、宝珠、如意宝珠、明珠、珠宝、宝」となり、同じく音写訳は「摩尼珠」及び音写は「摩尼、末尼」となる。尚、漢訳の「明珠」は、後述する「摩尼」＝「垢離」と意味において符合するものと考えられる。

以上、諸々の事柄を総合的に考え合わせてみると、既出の『仁王經疏』に見られる漢訳表記「思惟宝」は、的確に、梵語「Cinta-mani」を意訳している一例といえよう。前記の「真珠、珠玉、小珠、明珠、珠宝」等の表記は、直感的に、珠状（球状）をイメージさせるが、しかし、一度換名して「思惟宝」と表記した場合は、少なくとも一定の形態にイメージが固着される危険性は少ないだろう。ここに至って、初めて、我々は、或る種の固定観念に囚われることなく、事実に即して具体的に考えていく慎重な態度を保持する必要がある。と言うのは、私自身、所謂「宝珠」の形態に関しては、「珠状」（丸いもの）の一例しか認識できていなかったが、本稿の異様な四角柱状の「宝珠」の突如の出現に際して、従来の所謂「宝珠」の概念を再考せざるをえなかったからである。

既に前にも触れたが、今再び「宝珠」を意味づけると、「その所有者の総ての願を成就せしむるもの」と規定できる。この意味に類似する記載は次の仏典に求められよう。

即ち、『一切経音義』巻第二十一によると、

「摩尼——正云末尼、末謂末羅、此云垢也、尼云離也、言此宝光淨、不為垢穢所染也、又云摩尼、此云增長、謂有此

宝一処必増——長中其威徳、旧翻為如意隨意等、逐義訳也」²⁴

右記を整理すると、「摩尼」（末尼）＝「垢離」＝「宝光淨」と異字同意語の連関が辿れる。特に「垢離」と意味づけられる場合、「宝珠」が「清浄なるもの」であることを示唆している。この点、前述の「明珠」と「垢離」とは同義と考えられる。更に、「宝珠」は、「威徳あるもの」とも意味づけられる。

もともと、仏教上の「信仰」の所産であり、かつ、神聖なる「象徴」である「宝珠」は、仏教の芸術的世界においては、最も重要な位置に存在し、又、最も目立つ場所に表現され、多種多彩に展開されている。そこで次に、具体的に、壁画に表現された「宝珠」について詳述してみよう。

(五) 壁画の構成とその細部

この彩画断片（図1）は、トユク（吐峪溝）遺蹟の或る寺院の天井壁と回廊の側壁とに配置されていたものである。

まず、天井壁であるが、その中心をなすモチーフは、花卉と蕊部とのそれ々の外周を、白い連珠文に圍繞された大胆な意匠の大蓮華である。（図2）。花卉の彩色は、現状としては、暗い赤茶だが、恐らく、もともとは、ピンク色であっただろうと推定される。花卉の環状は、その半分程は破損されているものの、上下二重にそれ々々八葉ずつ連続していたものと考えられる。又、蕊部からは、放射線状にのびた細線が、連珠文帯に沿って無数に表現されている。

一方、天井壁の四隅の三角小間には、それ々々、アンドリュース氏の指摘された神聖なる象徴、或いは、燃え上る寶石が検出されるが、これこそ、正しく本稿の主題となる「宝珠」である。破損の進んでいる二ヶ所には、その焰の形しか確認できないが、ほぼ完全な形で残存

する他の二ヶ所では、その本体部の輪郭は極めて判然としており、又、三角形状と葉状とのそれ／＼の焰の形も、注視すれば、本体部の四方向から発しているのが確認できる。尚、「宝珠」の形態について、アンドリュース氏は、四角の角柱の形と判断しているが、その両端には、交差線による四区画があり、それ／＼には点が表現されている。この両端を、アンドリュース氏は、可視的な端と見なし、そして、一種の透視図法で描写していると指摘している。それから、天井壁の外周には、シンプルな灰色の縁飾りの帯状があり、そこには、黒く細い斜線が平行に走っていて、一種の錨鎖の効果を与えている。次に側壁に移ろう。

まず、「宝珠」群の見られる壁画(図3)から見ていくと、画面のほぼ中央あたりに、縦長の矩形があり、その中には「禪師觀宝珠光□」³⁰と漢字の銘文が判読できる。そして、すぐ右の場面(図4)には、現状として確認できるのは、横三列、縦二段に配置された、三方向から葉状の焰を発す「宝珠」群が検出される。尚、「宝珠」の形態は、先程の天井壁の場合と若干異なっている。即ち、焰の形が、葉状の一種しか見られず、又、本体部の両端の四区画の処理法が、外周に及ぶものと、その端部の内に更に小さく「田」の字を描くものとの二種が確認される。(挿図4)。一方、左の場面(図5)には、銘文にいう「禪師」が、その頭部と頭光とを僅かに覗かせている。容貌は比較的ぞんざいに扱われており、瘦身を思わせる顔には、眉間の上部に白毫らしいものが見られる。髪は灰色で、禪師の後方には、灰色の花を咲かせた樹木が見られるが、色は暈したブラウン・ピンクを帯びた黒の塊である。壁面の外周には、縁飾りとして、鋸歯状の植物文帯が、うねって波状をなして連続する。この帯状は次の側壁面の縁飾りにも見られる。

さて、今一つ残った側壁面(図6)には、画面中央あたりに、縦長の矩形があり、その中に「禪師觀七宝圖」³¹と漢字の銘文が判読できる。その左には、銘文にいう「七宝」³²と思われる形態が観察され、その縦

長の四角形の外周にはピンクの焰が廻っている。又、その四角形の中には更に矩形を幾つも区画し、交互にそれ／＼淡い鈍黄色と灰色とを配している。それらの矩形と焰との間には、連珠文帯が廻っている。更に右には、先程の禪師のような頭部と頭光と、そして、花の咲いている樹木が確認できる。最後に、全面面の外周には前述の側壁同様の鋸歯状の植物文帯が検出される。これは、アンドリュース氏の指摘によると、ギリシアのアカンサスのような縁飾りとの密接な類似があると考えられる。

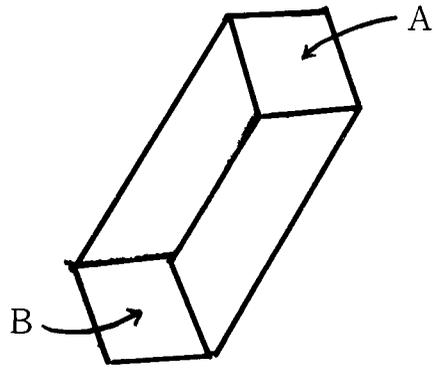
六) 構成の諸要素

先程は、壁画の構成とその細部を観察したが、ここでは、以上のような観察を踏まえて、壁画の構成要素の諸問題を以下の(一)～(九)の諸事項に分けて検討してみたい。

- (一)、神聖な象徴、(二)、火焰を発する宝石
- (三)、四角の角柱、(四)、交差線による四区画の可視的端
- (五)、透視図法、(六)、三角形状と葉状の焰
- (七)、連珠文、(八)、アカンサス状植物文
- (九)、漢字の銘文

以上の内、(一)～(九)は「宝珠」に関する事柄であり、(七)～(九)は、文化的問題に関するものである。即ち、前者は、「宝珠」の形態そのものの表現法についてであり、一方、後者は、吐峪溝の寺院壁画を成立させた文化的諸要素のそれ／＼である。それでは、まず、前者から考察していく。

ここで最も注目すべき点は、(三)の四角の角柱の問題である。それは、続いて(四)、(五)と密接に係わり合う。つまり、四角の角柱(四角柱)は、丁度、硝子製の四角柱のようなものを想定すればよいが、その両端は当然透過性を持つ。これを図説(挿図3)すれば、即ち、A面からB



挿図3 「宝珠」の本体部

面が覗ける訳であり、又、その逆も成り立つ。更に、A B 何れかの面上に視点を置くと、その面からの対面の方向に透視できる表現で「宝珠」が処理される訳である。以上の点で、重要なことは、この「宝珠」が、透過性を有すことであり、それは、前記或いは後記の「宝珠」の意味と密接である。即ち、「一切経音義」に云う「末尼」||「垢離」||「宝光浄」、或いは、『法華経』に云う「浄きこと宝珠の如し」及び「明珠」等の諸表記は、換言すれば、総て「清浄なるもの」を意味しているに他ならない。つまり、「清浄なるもの」は、何はともあれ、「透明」若しくは「透過性」でなければならないのである。と同時に、そこには、微塵の垢穢すら入る余地はなく、ただ一途に「粹穆」でなければならぬのである。この点、本稿の「宝珠」は、現実的に考えると、六角柱状の「水晶」に極めて近似していることが指摘されよう。

さて、次に、後者の文化的諸問題に触れていくことにしよう。

(七)、連珠文——このモチーフは、中央アジア一帯に広く見られるが、その起源は、イラーン系美術にあると、既に先学によって指摘されている。³⁵

(八)、アカンサス状植物文——このモチーフは、ギリシアのコリント式柱頭の裝飾意匠として使用されるものだが、前記のモチーフ同様、中央アジアで若干検出される。³⁶

以上の二点からは、遙か遠く西方のイラーンやギリシア等からの文化的影響を看取できる。しかし、次の(九)、漢字の銘文の問題を含めて考えると、西方文化と中国文化との接触、融合の跡が確認できる。即ち、この壁面に検出される文化的諸要素からは、東西文化交渉の一端を窺い知ることができるといえよう。冒頭でも触れたように、因に、このトゥルファン地域一帯は、かつてから、漢人文化の流入と温存とのあつた場所であり、その点、右記の漢字の銘文は、東方の中国文化の流入の一証拠となり得る。³⁷

ところで、本稿の「宝珠」の起源は、いったいどこにあるのだろうか。管見によると、中央アジアのクチャ地域一帯にも、この種の「宝珠」が分布し展開していることが確認されるが、その発生の本源地は、クチャ地域よりも更に西方に探求されるだろうと充分に推察される。前記のように、ギリシアやイラーンのモチーフと共存するこの種の「宝珠」は、一体どこまで遡れるのだろうか。無限に想像は広がる。しかし、この問題については、本稿では、調べがまだ不十分であり、従つて、今後の課題の一つとして残る。

(七) 壁画の年代

さて、ここでは、再び「宝珠」の細部の形状を観察した上で、壁画の制作年代について考察していく。まず、「宝珠」の細部は次の通りである。

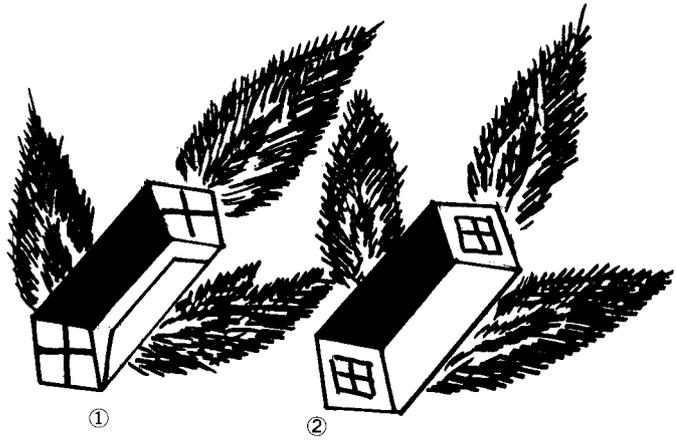
①、側壁(挿図4)

二例共に、外周の線だけで見ると、六角形状を示し、それ〴〵は、その三方面より、葉状の焰を発しているが、内側の細部が多少異なっている。即ち、前者(①)が、大きく十文字に両端が区画されているのに対し、後者(②)は、小さな「田」の字形が、両端の中央に区画されている。現状からは、後者の側面に台形状をなす区画線が検出さ

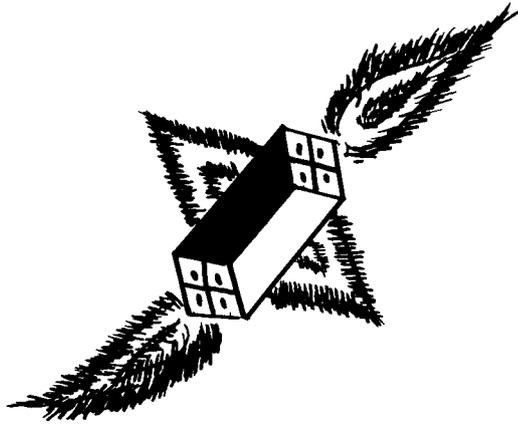
れないが、元来は、表現されていたものと推察される。

㊦、天井壁（挿図5）

完形に近い二例共に、本体部は側壁と同じく六角形状だが、この例では、焰は四方面から発している。即ち、両端部には、葉状の焰、そして、側面には、三角形の焰が付く。両端の区画は、十文字形で、それ／＼の四区画部内には点^④が確認され、側壁の両端部と比較すると、幾分意匠的である。尚、側面部内の台形状の一区画線は、現状では、不明である。

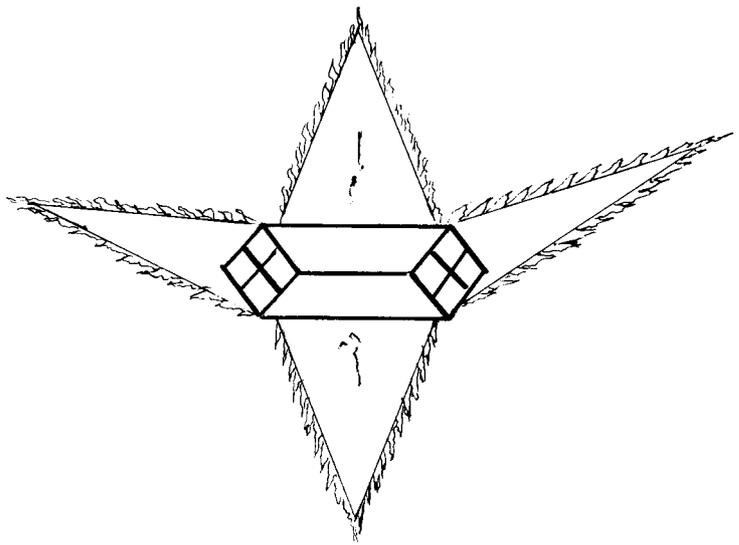


挿図4 側壁「観宝珠光」部分

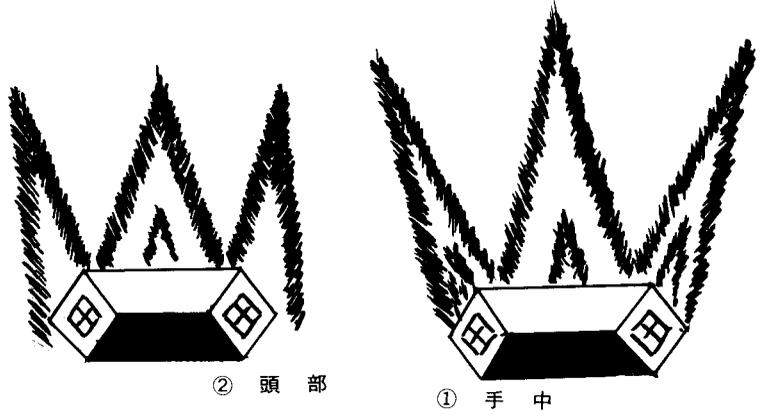


挿図5 天井壁「宝珠」部分

ところで、只今、前記のように、「宝珠」の形状を中心に、細部を観察してきたが、以上のような諸特徴をもつ「宝珠」は、一体いつ頃の作例なのであろうか。管見によると、この種の「宝珠」の分布は、主に六―七世紀の中央アジアのクチャ及びトルファン地域に多く確認される。又、この分布の中国内地での例は、特に雲岡石窟に集中している。^④以上の諸地域の内、雲岡石窟を除いて、中央アジアだけの諸例から、比較検討してみると、特に本稿の壁画の場合は、クチャ地域の「輪を銜える鳩洞」の「宝珠」の例に、^④かなり類似していることが分



挿図6 輪をくわえる鳩洞



挿図7 クレメンツ6

る。(挿図6)。尤も、微細なところは若干異なるが、「宝珠」の本体部両端の「田」の字形の区画及び本体部外周から発焰する表現法等において、類似する。尚、焰の形状に関しては、挿図6の場合には、長短二種の三角形状で、又、挿図5の場合には、短い三角形状一種と葉状一種、更に、挿図4の場合には、葉状一種のみが確認されるが、これらのバリエーションは、それほど「宝珠」の意味に影響を与えない。むしろ、発焰そのものにより「宝珠」の神聖なる「曜威」を意味しているものと考えられるのである。

ともあれ、吐峪溝の寺院壁画の「宝珠」と、「輪を銜える鳩洞」のそれとは、かなり類似している。後者の制作年が、ほぼ七世紀後半頃と比定されるので、恐らく、その前後の頃に、吐峪溝一帯において、この種の「宝珠」を表現した寺院壁画が制作されていたものと考えられる。事実、挿図7の例のように、同種の「宝珠」が、この吐峪溝附近で確認され、前記の推察を裏づけてくれる。

因に、七世紀後半頃の前後といえ、丁度、高昌王国は、大唐帝国

との勢力争いで危急存亡の場面に直面させられていた時期であろうか。或いは又、唐僧玄奘が、高昌国を通過する前後でもあつたらうか。このような時期に、本稿の壁画が位置づけられることは大過ないであろう。

(八) 「観宝珠光」

さて、ここでは主に、若干の経文を援用しながら、壁画に見られる主題表現の意義について考察を加えたい。

銘文に「禪師観宝珠光」と記されている場面は、正しく文字通り、独自の禪師が、神聖なる「宝珠」の威光に依つて、「止観」を得んがため、勇猛精進している状況と推測される。壁画断片の現状からすると、横二列に本体を斜めにして並んだ「宝珠」群と、樹下思惟の禪師とは、意味において対峙している。

このような場面の典拠となつたと思われる『法華経』の次の記載は、極めて示唆に富む。

「また仏子の未だ嘗て睡眠せずして林中に経行し、仏道を勤求するを見る。また戒を具して威儀欠くることなく、淨きこと宝珠の如くにして仏道を求むるを見る。」(傍点筆者)

「或は諸の比丘にして山林の中に在りて精進し淨戒を持つこと、猶、明珠を護るが如くなる有り。」⁴⁶⁾

前者の「淨きこと宝珠の如くにして」の句と後者の「明珠」という表記は、共に、既に触れたように、「宝珠」の「淨清なるもの」であることと密接である。更に、この「清淨なるもの」は換言すれば、即ち、「崇高」とでも言えよう。

以上のような「清浄なるもの」及び「崇高なるもの」へ至る道を欣求する修行者として、壁画中の「禪師」は意味づけられるが、このような状況をあり／＼と伝えていられると思われ、記載を、今暫く拾い、補っておこう。

「また、菩薩の勇猛精進し、深山に入りて、仏道を思惟するを見る。また、欲を離れ、常に空閑に処し、深く禪定を修して、五神通を得るを見る。」⁽⁴⁸⁾

「また、菩薩の諸の戲笑及び癡なる眷属を離れ、智者に親近し、心を一にして乱を除き、念を山林に攝めること、億千万歳、もつて仏道を求むるを見る。」⁽⁴⁹⁾

「また、諸の菩薩にして、深く諸の禪定に入り、身心寂かにして動ぜず、以て無上道を求むるを見る。」⁽⁵⁰⁾

さて、今、右に記した事柄を踏まえて、改めて、壁画を眺めれば、空現する摩訶不思議な「宝珠」群は、恰も、「仏陀」の如く威厳を保ち、それ故に、観者は、忽ちにして、敬虔かつ崇高なる世界へ導かれてゆく、という主題を表現したのが、この壁画の意図しようとしたところなのではあるまいか。銘文に云う「観宝珠光」は、敢えて大胆に云うと、「観仏」とでもいえよう。

おわりに

以上、本稿の異様な「宝珠」について考察する前提として、所謂「宝珠」の諸々の問題を様々に展開してみた訳だが、改めて確認しておきたいことは、所謂「宝珠」は、梵語「Cintamani」からの漢訳の一例であり、この他には、「垢離」、「宝光浄」、「思惟宝」等とも諸訳されること。又、原義に即して忠実に考えたと「その所有者の総ての願を成

就せしむるもの」と定義づけられることである。

さて、もともと、本稿執筆の主な動機は、中央アジア・トユク遺蹟寺院壁画に表現された摩訶不思議な形態の「宝珠」に起因していた。即ち、その「宝珠」は、一般に多く知見される「珠状」ではなく、むしろ、稀有な、四角柱状であり、その透過性の本体からは、「躍威」を意味する焰を発しているのである。

ともあれ、本稿においては、仏教上の「信仰」の所産である「宝珠」は、珠状のみでなく、角状（非珠状）も共に存在することが確認されたが、しかし、その形態を問わず、その意味は、「清浄なるもの」及び「崇高なるもの」と考えられ、又、換言すれば、即ち「神聖なるもの」とも定義できよう。

最後に、本稿添附の図版につきましては、早稲田大学図書館特別資料の御協力を賜りましたことをここに記し、深く感謝の意を表しておく。

〈註〉

- (1) A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkestan*, Berlin, 1912.
A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Berlin, 1920.
- (2) 『アジア仏教史・中国編Ⅴ』（監修・編集・中村元、笠原一男、金岡秀友）校成出版社、昭和五十年、一四四頁。
- (3) 熊谷宣夫「西域の美術」（西域文化研究会編『西域文化研究第五』、中央アジア仏教美術）法蔵館、一九六二年、一六四—一六九頁。
- (4) 図録「陝西、甘肅、新疆出土、漢、唐、中華人民共和国、シルクロード文物展」
- (5) 読売新聞社、一九六九年、参照。
布目潮風「唐と西域」（山田信夫編『東西文明の交流2』、ベルシアと唐）平凡社

昭和四十六年）一一四—一三三頁。

前嶋信次「玄奘三蔵—史実西遊記」岩波書店、一九五二年。

- (6) 西域文化研究会編、前掲書、挿図三三〇、尚、この木彫仏は、現在、ベルリンの国立インド博物館に収蔵されている。

- (7) 同右書、図版第九。

- (8) 小笠原宣秀「吐魯番浄土經の一断面」(龍谷史壇四四号、所収)、昭和三四年。

- (9) この壁画を収録した本は、スタイン氏の弟子であり、美術家であるアンドリュース氏によって、スタイン氏の死(一九四三年)後、五年たつてから、インド政庁の指図の下に編著されたものである。本は、本文編と図録編との二部よりなり、二つ折の紐とじ本中に壁画は収録されている。尚、この書物の名称は次の通りである。

『Wall-paintings from ancient shrines in Central Asia, recovered by Sir Aural Stein. K. C. I. E. described by Fred H. Andrews, O. B. E. published under the orders of the Government of India, London, Oxford University Press, Geoffrey Cumberlege, 1948.』

- (10) 『大正大蔵経』第十八卷No 90、八三八頁。

- (11) 同右書、第二卷No 125、七三二頁。

- (12) A. Grünwedel, *ibid.*, Mingot bei Qyzil, 3 Anlage, Höhle 3, Pretahöhle Fig. 392, S. 170

- (13) 即ち、「四方」が「まわり」或いは「ぐるり」を示すのと同様、「八方」も「諸方」或いは「あらゆる方面」を示し、両者は同義となる。

- (14) 主に、代表的仏典を中心として、逐一点検を試みた。

- (15) 『漢訳対照・梵和大辞典』(外務省文化事業部助成、文学博士、荻原雲来編纂)

- (16) 註10、前掲、第三十三卷No 179。

- (17) 所謂「Cintamani」の音写諸訳出例の一、その他に次の如く音写訳される。

①震珍末尼(『觀世音菩薩如意摩尼陀羅經』大20 No 1083)、②震珍摩尼(『觀世音菩薩如意摩尼陀羅經』大20 No 1084)、③震珍摩尼(『觀自在如意輪菩薩瑜伽法要』大20 No 1087)、④震珍摩尼(③同経)、⑤振珍摩尼(『不空罽索神變真言經』大20 No 1092)、⑥振珍摩尼(⑤同経)、⑦真陀摩尼(『陀羅尼集經』大18 No 901)、⑧真多摩尼(『菩提場所説一字頂輪王經』大19 No 950)、⑨進珍末尼

(都表如意摩尼轉輪聖王次第念誦秘密最要略表』大20 No 1089)、⑩栴陀摩尼(『賢愚經』大4 No 202)、⑪蘇多末尼(『金光明最勝王經』大16 No 665)、⑫啣多麼尼(『仏説如意輪蓮花心如来修行觀門儀』大20 No 1090)、⑬耶多麼尼(⑫同経)、⑭栴壇摩尼(『觀弥勒菩薩上生兜率天經』大14 No 452)

※①⑨⑩、唐、⑩元魏、⑫⑬⑭、宋、※①⑨、⑫⑬、密教部、⑩本緣部、⑪⑭、經集部、※尚、記号「大」は「大正新脩大蔵経」の略号とす。

- (18) 註15、前掲。

- (19) 註16、前掲。

- (20) 註10、前掲、第三十九卷No 178。

- (21) 註15前掲書を参照の下に説明。

- (22) 所謂「宝珠」の別称で、「明月珠」とも記す。以下、類例を上げておく。

「明月珠」①「仏説無量清淨平等覺經」大12 No 301、②「大宝積經」大11 No 310、③「法苑珠林」大53 No 212、④「大度經」大8 No 25、⑤「仏説恒水經」大1 No 33、⑥「仏説方等般泥洹經」大20 No 378。

「明珠」①「妙法蓮華經」大9 No 264、②「大方広仏華嚴經」大9 No 278、③「経律異相」大55 No 211、④「仏説觀仏三昧海經」大15 No 643、⑤「法苑珠林」大53 No 212。

尚、その他に「明月宝」「明珠宝」「宝明珠」「大宝積經」大11 No 310、「明月摩尼」(『仏説無量壽經』大12 No 300)、「明月摩尼珠」(『経律異相』大55 No 211)、「明月宝珠」(『明月神珠』(『法苑珠林』大53 No 212)、「明月珍珠」(『漸備一切知徳經』大10 No 279)、「明月珠宝」(『大乘悲分陀利經』大3 No 158)、「摩尼明月珠」(『菩薩瓔珞經』大16 No 656)等がある。

- (23) 註16、前掲、参照。

- (24) 註10、前掲、第五十四卷No 2128。

- (25) Andrews, *ibid.*, plate IX, painted fragments Toyuk Shrine IV

- (26) 彩色の判断は、アンドリュース氏の説明に従う(以下同様)。

- (27) Andrews, *ibid.*, PL IX, P. 37-38.

- (28) 註27参照。

- (29) 註27参照。

- (30) 壁画の現状からは、その箇所の文字は判読しにくい、註31からして、恐らく「図」という文字であろう。

(31) ここでは、右記より判断としていて、現状から「図」と判読できる。
(32) 註15前掲書に於いて「七宝」には次の二種が考えられる。

(1) 七宝 (Saptaratnani)

① 金 (Suvarnam) ② 銀 (rupyam) ③ 毗琉璃 (Vaiduryam) ④ 水精 (Sphatikam) ⑤ 瑪瑙 (Musāragatah) ⑥ 赤珠 (lohita-muktika) ⑦ 虎魄 (asma-garbhām)

(2) 輪王七宝 (Cakra-varinām Sapta ratnani) 又は、成就七宝 (Sapta ratna Samanvāgatah)

① 金輪王・寶輪 (Cakra ratnam) ② 馬輪 (asva ratnam) ③ 象輪 (hasti ratnam) ④ 摩尼輪 (mani ratnam) (珠宝) ⑤ 玉女・女宝 (str ratna)

⑥ 主兵宝 (Khadga ratnam) ⑦ 主藏宝 (Parina yaka-ratnam)

以上が「七宝」のそれぞれに対応できるが、壁画の現状からは、具体的な内容については一切不詳。因に、「摩尼宝」が「七宝」の一つであることは、この壁画中の主題と極めて密接であるといえよう。尚、中央アジア・クチャ地域の「輪を衝える鳩洞」の壁画中には、明らかに、前記の輪王七宝と考えられる表現が確認され、相当興味深い。

A. Von Lecoq, *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, 7 Teilen, Berlin, 1922-33, V Teil, Tafel 23a, Fig. 39, S. 57.

A. Grünwedel, *ibid.*, Ming-öi bei Qyzil, Höhle mit den ringtragen Tauben, Fig. 270, 271, 272, 273, 274, 275, S. 123.

(33) 岩波文庫『法華経』上、序品第一、三十頁。

(34) 註32参照「七宝」中に「水精」(水晶)が見られることは、極めて示唆的である。

(35) 林良一『シルクロード』美術出版社、一九六二年、一七八―一八四頁。

(36) トウルファン地域では、トユクの龍王洞中に確認される。尚、龍王洞の場合、同種の「宝珠」とこの植物文が検出され、両者の共存関係が認められる。

(37) 事実、吐魯番出土の文書の大多数は、漢文で書かれている。註4参照。

(38) 中央アジア・クチャ地域クムトゥラ、千仏洞 (Ming-öi bei Qurtura) の例では、ギリシア神のティーターンやトリトーン等と共存して検出される。

A. Grünwedel, *ibid.*, Ming-öi bei Quntura, H. 15 der 1. Schlucht, Fig. 7, S. 10.

(39) この形状の性質や意味については不詳。
(40) 右記に同じ。

(41) 雲岡の場合は、制作年は、五世紀後半と考えられ、管見によるとこの例が最古である。因に、中央アジア全域での出土例は、総て、雲岡の例よりも新しく、しかし、その源流は、元来、クチャ地域を含め、更に西方にあると考えられるので、この問題は、今後課題として残る。

(42) A. Grünwedel, *ibid.*, Fig. 275, S. 123.

(43) 註32参照 Lecoq, *ibid.*, VII Teil, S. 29.

「Tabellarische Übersicht, über die Fundorte und Fundstellen der in Berlin vorhandenen Gemälde 1. und 2. Stils.」

(44) A. Grünwedel, *ibid.*, Toyog Mazar, Figuren zu Tempel Klemenz 6, Fig. 642, Fig. 644a, S. 322.

(45) 岩波文庫『法華経』序品第一、三十頁

(46) 同右書 序品第一、五十六頁

(47) 同右書 序品第一、三十頁

(48) 同右書 序品第一、三十頁

(49) 同右書 序品第一、五十六頁

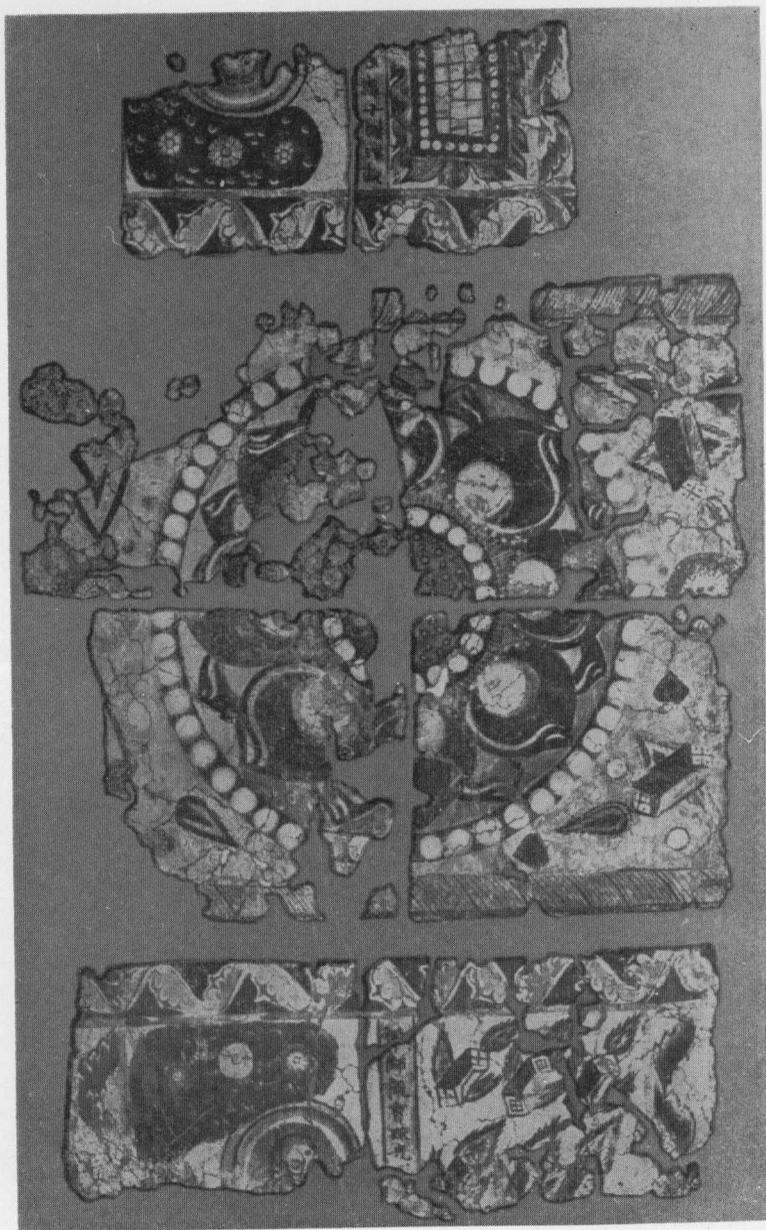


図1 トコク寺院壁画断片全図

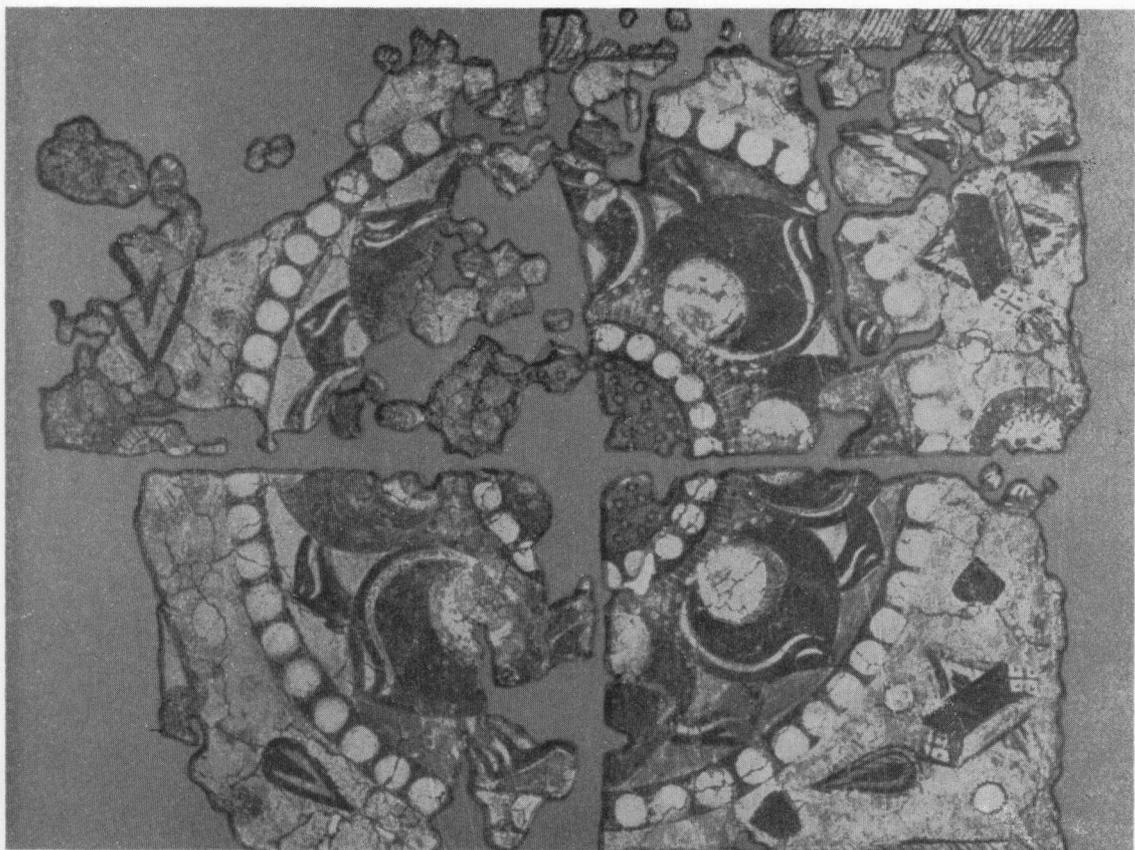


图2 天井壁·蓮華部分



图3 側壁·「禪師觀宝珠光」部分



图4 侧壁·「宝珠」部分

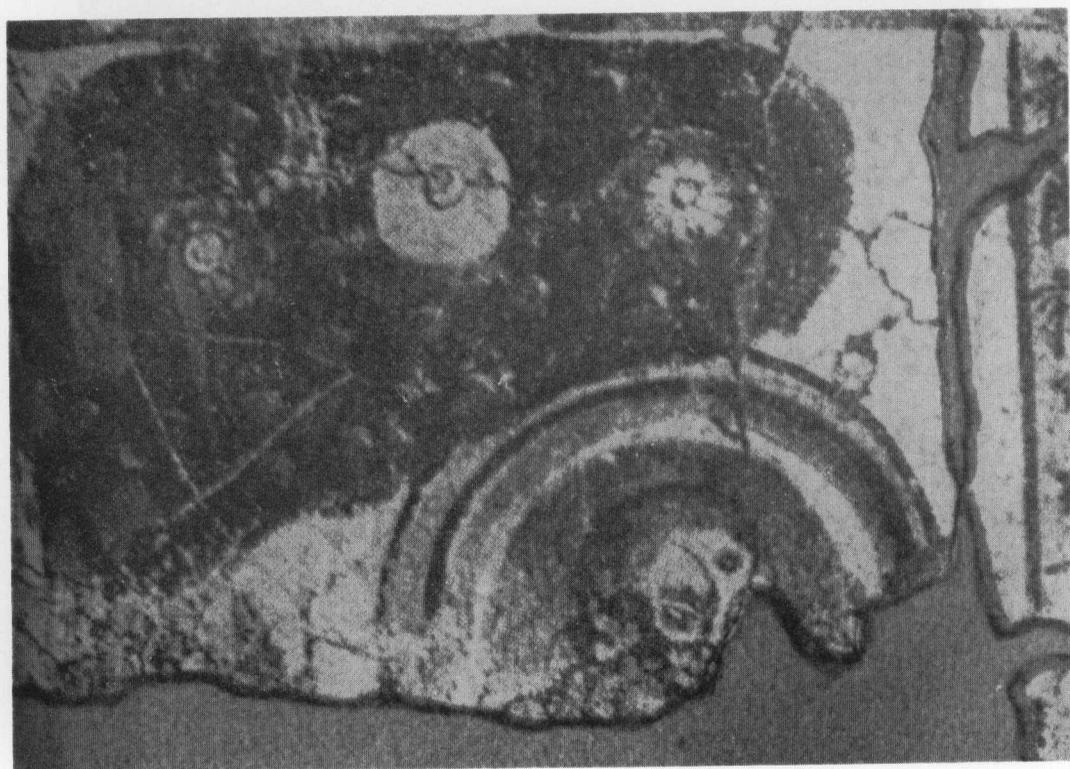


图5 侧壁·「禅师」部分

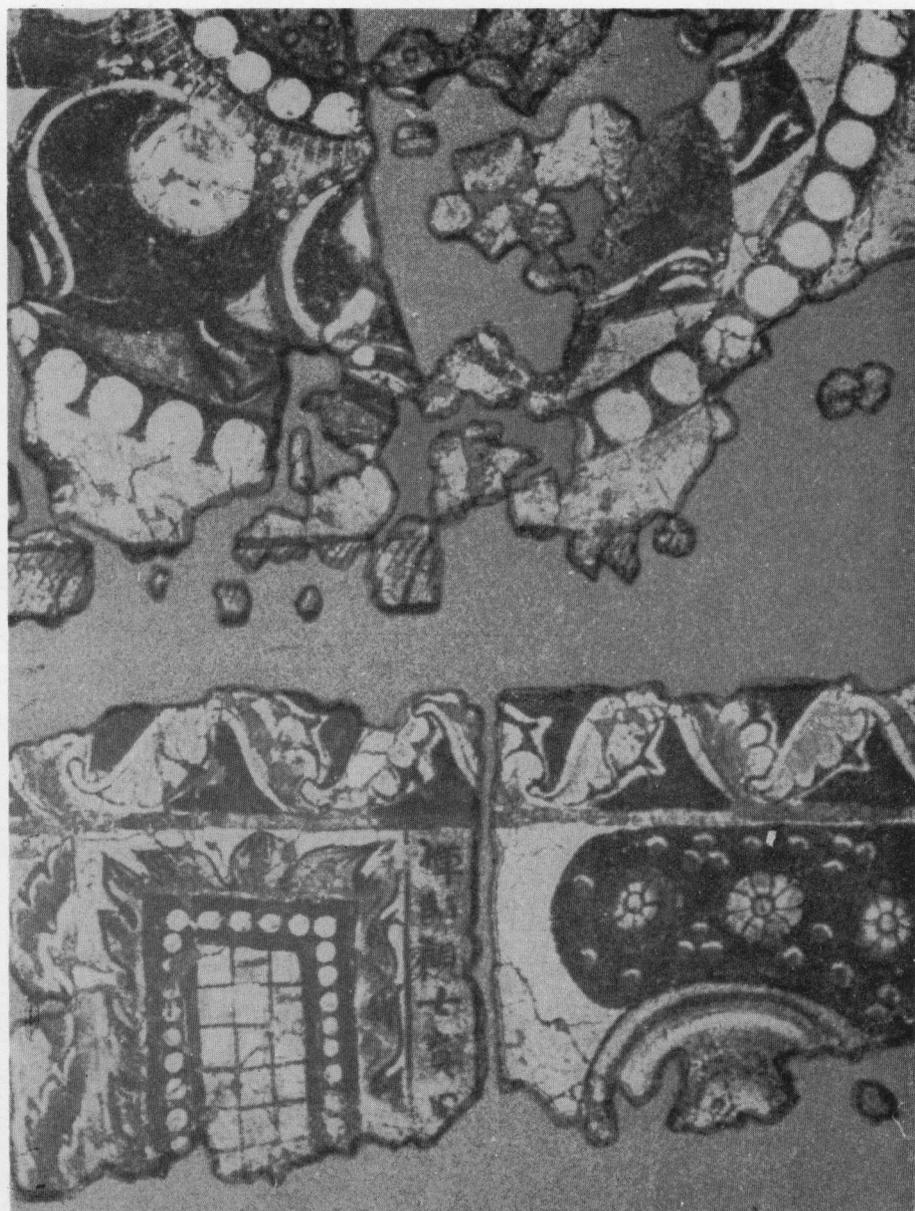


图6 天井壁部分及侧壁·「禅师观七宝图」部分